現代座 通巻 498 号　年 4 回（3 月 1 日、6 月 1 日、9 月 1 日、12 月 1 日）発行　　1967 年 2 月 18 日 第三種郵便物認可

共生のきずなを求めて！

NPO 現代座

2023 年 9 月 1 日　発行
（通巻 498 号）定価 100 円

現代座レポート　No. 95

・ＮＰＯ現代座公演『忘れものはありませんか？』　（1）
・期待された劇作家・武本英之のこと　木村快　（2）
・武本英之を偲んで　鬼塚正徳　（3）
・われらいずこより⑮十年間を振り返って　木村快（4- 6）
・監督 根本銀二　凱旋上映会　根本保夫　（7）
・おしらせ・会館日誌・会員入会・継続・寄付　（8）

NPO 現代座ホームページ　http://www.gendaiza.org/

特定非営利活動法人 ＮＰＯ現代座　発行責任者：木村快
〒 184-0003 東京都小金井市緑町 5 丁目 13 番 24 号　TEL 042-381-5165（代）　FAX042-381-6987

ＮＰＯ現代座公演 『わすれものはありませんか？』

清水 理彩

丹波 枠

丸山 夏歩

八木 浩司

長谷川 葉月

伊藤 嘉朗

八木澤 賢

【出演】

『わすれものはありませんか？』はタクシードライバー物語第２弾として、２００８年に現代座３階小ホールで公演しました。大変好評で２０１０年まで何度も公演し、タクシー協会の集まりや、移動支援ＮＰＯの関係者の皆さんの集いにも出かけて行って公演しました。
今回は13年ぶりの再演、新しい出演者で挑みます。

【あらすじ】
芳子さんは七十代で一人暮らし。脚を骨折して自由に動けなくなってしまいました。
移動で困っている人を支えようと「移動支援ＮＰＯ」の塚本さんは協力を申し出るのですが、芳子さんは「絶対に人の世話にはなりたくない！」と拒否。通院にはお気に入りのタクシードライバー、リキさんの運転する一般タクシーを使います。
今日もリキさんのタクシーで病院にやって来た芳子さんに不思議な小包が届いたことから大騒動に……。
彼女の閉ざされた心の扉が動き出します。

ＮＰＯ現代座公演　『わすれものはありませんか？』

2023 年 9 月 29 日（金）～ 10 月 2 日（月）

9 月 29 日（金）　14 時～ / 19 時～
9 月 30 日（土）　15 時～
10 月 1 日（日）　14 時～
10 月 2 日（月）　14 時～

※ 9 月 30 日 (土) 終演後、故・武本氏の追悼会を行います

【会場】現代座ホール
【参加費】一般…3,500 円　学生…2,500 円　高校生以下…1,000 円

■ご予約・お問合せはＮＰＯ現代座まで

TEL：042-381-5165
FAX：042-381-6987
MAIL：gendaiza.ticket@gmail.com
※現代座 HP の予約フォームから予約できます。

予約フォーム
QR コード

期待されていた劇作家

武本英之のこと

木村　快

現代座がタクシー運転手を主人公にした作品を上演し始めた頃、武本英之（たけもと・ひでゆき）はタクシー業界新聞の編集長だった。つくば観光交通の山本氏から「業界紙の記者で、外部からは見えない厳しい現実を話してくれるはずだから、ぜひ会ってほしい」と言われ、時間を作って会ってみた。

本題に入る前の雑談で、今、明治末期に日本人がアメリカの鉄道建設で働いていたこと調べてるんだと話すと、突然彼は顔を輝かせて「ぼくは大学を出てから、どんな仕事をすべきか考えながら、バックパッカーでアメリカ大陸を歩いて横断したんですよ」と言い、働く庶民との接触を通して知るアメリカは、大学の講義で思い描いていたアメリカとは全く違っていたと話し始めた。

2008年5月、3Fホール舞台でのカーテンコール。

結局、タクシー業界の話はそっちのけで、現代が直面する社会文明論になってしまった。

その彼が、最後に小さな声で「ぼく、実はシナリオを書いているんです。ちょっと目を通してくれませんか」と言う。記者になる以前には、シナリオ学校へも通っていたのだという。映像シナリオと舞台演劇では作品の手法が全く違うのだが、預かって持ち帰った。

彼の作品の特徴は、視点が一般シナリオ作家のドラマと違って、何気ない人物の会話を通して、控えめながら現代社会のひずみと悲哀を感じさせることだった。これなら本格的な舞台演劇の執筆も可能だと思った。

「ぼくの書いた台本、本当に芝居になりますか」と言いながら書き上げた第一作が「忘れものはありませんか?」である。これは大変好評で、2008年から2010年にかけて公演を重ねた。

当時の彼は本業が大変な時代だったはずだが、NPO現代座の正会員となり、連載企画「現代座を支える人々」の取材編集を担当。2016年までに24回にわたって連載している。

現代座内の作品会議ではタクシー会社の現場のことだけでなく、移動支援NPOや、くらしの中の移動の問題を追求したいと語り、新しい作品を期待されていた。しかし、本社の内部事情で社長を引き受けることになり、やむなく執筆を中断していた。

そして2018年に突然亡くなってしまった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

追悼公演を望む多くの声がありましたが、コロナ禍で公演が難しく、ようやく実現できそうです。

命日の9月30日には、公演終了後ささやかな追悼の集いも予定しています。

稽古開始

どんな舞台になるのか

今回出演する俳優たちにとっては初めての作品であり、当然、十五年前の舞台を観た者はいない。一見、淡々と叙述された台本は、ちっともドラマチックではない。

社会に絶望して背を向けた芳子おばあさんと、移動支援NPOの役割を背負って奮闘する男の塚本、これを結びつけるのが明治時代のバイオリン演歌第1号と言われる「白菊の歌」ときている。

何がどうなってるのか、それを詳しく説明するようなセリフもないし、スマホでチョチョイと探ってみてもわからない。これには若い俳優たちはちょっと戸惑い気味で、悪戦苦闘している。

十五年もたつと、日本もすっかり変わってしまったらしい。一体どうすればいいのだろう。

と言いながらも、移動支援NPOの活動家を招いて話を聞いたり、タクシー会社に見学に行ったり、2023年版『わすれものはありませんか?』の稽古にも熱が入ってきた。

時代を見つめる劇場になって欲しい。

武本英之・没後5周年を偲んで
わすれてはいませんよ

『わすれものはありませんか?』を書いて

武本　英之

五〇歳にして初めて戯曲を書きました。タクシー専門紙の記者をしている関係で「ひとつ書いみては」と囁かれたのがきっかけでした。

「一幕物を書け」と木村快先生から言われて着手したのが昨年九月。それから音を上げる今年二月まで七回の書き直しを命ぜられました。早朝や土日の空き時間に書きました。一つのお話が人間の躍動するドラマに変貌する過程を、大工の棟梁が弟子に教え諭すように、一歩一歩入念に教えていただきました。胸突き八丁、クライマックスの仕上げのハードルはきつかった。最後、画龍点睛の瞳を快先生が書き込んで一つの旅が終了しました。

訴えたかったことは、閉塞した時代の波に飲まれたタクシードライバーやＮＰＯボランティアの人々に「元気を出そうよ」ということ。大げさに構えなくとも、それは目の前に転がっているのかも知れません。忘れ物のように。

これから先は役者の方々にお任せします。言葉と身体を通じて、どんな劇が踊るのか楽しみです。

（２００８年、初演のパンフレットより）

武本さんの「わすれものはありませんか?」

鬼塚正徳

武本英之氏の突然の他界からもう5年が経つ。今回、追悼を兼ねて彼が脚本を書いた「わすれものはありませんか?」を、現代座が上演してくれるという。これに関して少し話をしたい。

彼は、主にタクシーと交通関連の記事を扱う専門紙である東京交通新聞社に勤め、編集局長から社長にもなった。学生時代には劇のシナリオライターを夢見て、脚本の専門学校に通ったそうだが、小生とは福岡市出身の同郷の縁で一緒に飲み歩いていた。

そのころ現代座の役者さんの一人が、副業でつくば観光というタクシー会社のドライバーをしていて、その話を聞いた現代座の木村快さんがそれを「タクシードライバー物語・小さなカフェで」という劇にした。記者としてタクシードライバーに関わるその劇を取材した時、彼の心に火がついた。快さんに弟子入りして、そして初めて書き上げたのが、この『わすれものはありませんか?』だった。快さんからは厳しく指導されたこと、夏休みを返上して何回も書き直して、本当に大変だったと笑いながら話していた。

『わすれものはありませんか?』が書かれた２００８年当時、顕在化してきた移動困難者に対して、助け合いの市民活動として自家用車を使った移送サービスが広まっていて、それを白タク行為だとタクシー業界が批判し続け、小さな市民活動は大きなプレッシャーをかけられていた。そんな時期に、タクシー事業者とＮＰＯが対等な立場で、利用者（お客様）を前にしてものを言い合う脚本だった。

彼はもちろんタクシー業界についてその発展を心より望んでいた。そのためにタクシーなどの個別輸送を必要とする利用者に対して何ができるか、何をやらねばならないのかを常に考えていた。そんな時に、このタクシー業界とＮＰＯとの対立をどうすればよいのかを考えてこの脚本を書いた。

この劇が初めて上演された時に、これを見たタクシー業界の一部の人たちや、ＮＰＯの移送サービスをやってる者たちも、これを自分のところで上演し、関係者に見てもらいたいと思った。当時、千葉のタクシー協会や世田谷のＮＰＯ団体が、現代座に依頼してこの劇を地元で上演している。京都や大阪などでも上演したかったが、さすがに役者さんたちの宿泊代や交通費の負担が大きくて断念したということも聞いている。

今回この『わすれものはありませんか?』の上演で、彼の思いを再度、関係者が生で観劇できることに感謝したい。もちろんこれが上演された十数年前と現在とでは、タクシードライバーの減少や配車のＩＴ化や住民参加での交通問題の解決を目指す状況など、社会情勢が大きく変わっている。

ただ彼が言わんとした利用者を前にした問題解決の姿勢は、「くらしの足をみんなで考える全国フォーラム」の開催や「地域公共交通活性化再生法の法定会議」の設定などに表れていると思う。彼のメッセージが今の関係者にどのように受け止められるのかも含めて、現代座の久しぶりの公演を楽しみたい。

世田谷区福祉移動支援センター事務局長

木村ノート◆われらいずこより来たる 第3部
⑮十年間を振り返って

木村　快

前回までの記述

【第1部】日本新劇史・資料からのまとめ

①・レポート81号　１９５０年、新劇運動の分裂
中間派は「ヴェリテ・せるくる」を設立。

②・レポート82号　１９５１年、ヴェリテ解散。
真山、草村、槇村で新制作座。

③・レポート83号　１９５４年、庶民の新劇を標榜
労働組合関係者の支持で全国公演が始まる。

【第2部】活動に参加した木村快の視点から

④・レポート84号　１９５９年⑴特別研究所開設。

⑤・レポート85号　１９５９年⑵巡演活動の実態

⑥・レポート86号　１９６０年　安保闘争。平和集会
では国際的要人からも注目が集まる。

⑦・レポート87号　１９６３年⑴
インドネシア訪問日本文化使節団公演記録

⑧・レポート88号　１９６３年⑵
ユートピア新制作座文化センター設立。

⑨・レポート89号　１９６４年
ユートピアの破綻・劇団員・従業員の首きり。

⑩・レポート90号　１９６５年⑴　世の中から捨てられた若者たち

【第3部】生まれ変わって

⑪・レポート91号　１９６５年⑵　新しい生き方を探して

⑫・レポート92号　１９６９年　最初の試練

⑬・レポート93号　１９７０年　新しい劇団をつくろう

⑭・レポート94号　１９７２年　新稽古場建設から映画『同胞（はらから）』へ

⑮１９７５年・十年間を振り返って

【いったいどうすればよいのか】

◆経済文化が混乱した時代

「われらいずこ」の道を少し振り返ってみよう。１９６５年、新制作座から首を切られた若者たちが「首切り反対」の活動を開始した時代は、ベトナム戦争で世界中が揺れていた時代で、１９７６年にアメリカがベトナムから撤退するまでは、日本の社会も大きく揺れていた。アメリカ経済の混乱によるドルショックは日本の経済も混乱させたし、政治面では田中角栄元首相がロッキード事件での収賄問題で逮捕されるなど、この国はどうなるのか判らない時代だった。

統一劇場にとって最も深刻な問題は労働運動も次第に変化し、１９７０年代に入ると、「首切り反対の争議団です」と叫んでも、反応してくれる組合がなくなってきたことだった。（92号参照）

◆何が何だか判らない中で

それでいながら前号で紹介したように、思いがけない成り行きで地下ホールを備えた立派な会館が出来あがっているし、１９７５年には映画『同胞』の影響で、全国の青年たちから「同胞（はらから）の劇団」と呼ばれるようになっている。だが、それは自分たちが望んで実現したものではなく、周囲の人々から守られた結果であり、運が良かったと思うしかない。

◆全く特殊な寄せ集め集団

争議団は自立できる集団ではなかった。彼らを育てたのは新制作座という、世間の常識では理解しにくい独特な仕組みを持った劇団だった。戦場における軍隊の戦闘員を想像するといい。毎日、分刻みのタイムスケジュールで公演場所へ移動し、仮設舞台を構築し、芝居のセットを組み、幕を明け、芝居の上演中はじっと息を凝らし、舞台が終わると、次の公演地へ移動するための作業を済ませ、夜更けの宿へ帰る。毎日どう行動するかは総て幹部からの指示だ。世の中が変動する時代だから成りたった現象でもある。

◆「統一劇場」という争議団の特徴

首を切られたときは、お互いの名前さえわからなかった。一応の舞台歴を持つ劇団員は10名足らずで、ほとんどは経歴4年以下の若者たちだった。

人をまとめる立場に立ったことのない木村がリーダーを押しつけられたわけだから、集団のまとめ方がわからない。ただただ、みんなの意見を聞きながら、とっさの判断で方針を決めるしかなかった。

新制作座で徹底した集団生活の訓練を受けていたから、固まって生き延びることはできた。舞台で労働歌を歌うことができたのも、新制作座の新人教育は常に舞台での合唱が基本だったからだ。

◆演劇集団らしさを求めて

やれそうなことは何でもやってみるしかなかった。もう争議団では通用しないのだから、いよいよ演劇集団らしい方向へ向かわなければならない。

木村には劇作の経験はなかったが、見よう見まねで１９６６年に『雑草のうた』、１９６８年に『おふくろさん・こんにちわ』を制作した。内容は労働組合関係者に受け入れて貰うために、中小企業の労働問題を扱った。それでやっと演劇班としても公演を続けることができるようになった。ところが労働運動の雲行きが変わればこれがまた問題になる。

【新しい作家を育てよう】

◆三半規管の障害を抱えて

新作『おふくろさん・こんにちわ』の仕込み稽古をしているとき、木村は激しい耳鳴りと目まいに襲われて倒れた。町医者の往診を受けると「風邪だろう」というので、寝たり起きたりしていた。しかしどうにも動けなくなって病院に運び込まれた。病院で精密検査をした結果、原因不明の「メニエル症候群」とかで、三半規管の障害で治療法はないと言う。以来、右耳は全く聞こえなくなってしまった。それでいながらレポート92号の「最初の試練」で紹介した南九州行きである。

若かったせいもあるが、体調そのものは悪くなかったので、自分なりにコントロールし、仕事をつづけた。

◆またもや倒れる

そして１９７０年春、また倒れて入院となる。もう何としてもリーダーの役割は無理だと思った。それでも何とか書きかけていた新作『希望』を秋に仕上げて上演を始めた。企業合併で追いつめられる若い労働者たちを描いた作品なので、どうなるだろうと心配だった。

ところが地方で公演を始めてみると大変好評だというのでひと安心。だが、ここらで区切りをつけなければと思った。自分が役に立たなくなる前に、何とかしてやっていけるような劇団体制を整備しなければと焦った。

◆１９７１年　山形雄策さんを訪ねる

この寄せ集め集団をどう展開していくべきかについては、争議開始のときにいろいろアドバイスをいただいた映画脚本家・山形雄策さんを訪ね、相談してみた。

山形さんは昭和初期、作曲家・山田耕筰中心の歌劇『カルメン』や『セビリヤの理髪師』などを制作上演した「金曜会グループ」の文芸部員で、独特な劇場経験を積んだ人である。戦後は商業映画では制作困難だった『暴力の街』『松川事件』といった社会的テーマの作品を書き、独立プロダクション運動の中心的存在でもあった。

◆自分たちで作家を育てろ！

山形さんに相談したかったことは、自分が仕事できなくなった時のために、誰か頼りになる作家を確保しておきたいと思ったからだ。そこで「いずれいくつかの集団に別れることになると思うんですが、どなたか作品を書いてくださる方はいないでしょうか」と伺ってみた。

「芝居の台本を書きたがってる人間はいくらでもいるが、君らはもう独特の体質を身につけてるからな。君らの体質を活かせる作家はいないよ」

「どうしたらいいんでしょう」

「自分たちで育てたらいいじゃないか」

「自分たちでですか？」

「勉強する気があるんなら、協力するぞ」

そこで劇団内に作家育成講座を開いて貰うことになった。

◆１９７２年・石塚克彦チームの誕生

前号で石塚克彦が『オモチャの青春』を書き始めた」と記述したが、実際の経過は山形さんと相談した上でのことである。

石塚は美術学校出身で、新制作座では真山美保の直属スタッフとして舞台美術を担当していた。しかし劇団の首切り政策に反対したため、一緒に切られてしまった。彼は争議チームでも舞台美術を担当していたが、古参メンバーの中では孤立していて、そろそろ美術家としての自立を考えているようだった。そこで石塚と話し合って、「全く君自身の方針でいいから、若手中心のチームを作ってはどうか」とすすめてみた。山形さんも協力してくださるし、古手メンバーは一切関わらないことと、スタッフもキャストもすべて石塚の希望する若手メンバーで編成することにして、新しいチームをつくった。

◆『オモチャの青春』

石塚は山形さんに弟子入りして第一作に取りかかった。題材は地方の潰れかかったオモチャ工場を再建する若者たちの話で、それをポケット・ミュージカルと銘打って上演してみた。そこには全く新しい統一劇場の姿があった。

歌と踊りは争議以来、『青年アンサンブル』の名称で活動を続けていたから、若手俳優が待ち構えていた。山形さんもこれならなんとかやれるだろうということで、思い切って地方公演を担当するチームとしてスタートさせた。

これで木村快・作『希望』と、石塚克彦・作『オモチャの青春』と、全く色彩の違う二班が全国を駆け巡ることになった。

【わが道を行け】

◆1974年・専門家から馬鹿にされて

1973年にお世話になった方々に『希望』を観ていただいた。大変好評で激励された。山田洋次監督が統一劇場に関心を持ってくださったのもこの時からだった。

誰がどう手回ししたのか、翌1974年の演劇雑誌「テアトロ」に『希望』の上演台本が掲載された。ところがこの台本を読んだ新劇界の演劇専門家たちが、別の演劇雑誌「悲劇喜劇」でめったやたらに批判しまくった。その文言のいくつかを拾ってみると、

「二十年前の芝居を読んでいる感じ。昔の左翼演劇の一つのパターンで新鮮味がない」

「単純すぎる。ちょっと芸術にはほど遠い感じ」

「教条主義的で初歩的である」

「昔の職場演劇は職場の問題をアップ・ツー・デートに取り上げていたけど『希望』にはそれがなく、労働者の問題を観念的に扱っている」

「この手のドラマは、本当の意味で大衆にアピールしない」…等々。

『希望』は1970年秋以来、この時点ですでに全国450回以上公演していたから、これはいい刺激になった。もう彼らに認めて貰う必要はない。変な話だが、馬鹿にされたことでわが道を行く確信ができた。

【1975年、十周年・新体制誕生】

◆第2世代の新幹事会が誕生

1975年、全く新しい指導メンバーによる幹事会が選ばれた。幹事長は石塚克彦、副幹事長は由井数（つもる）で、その他、思い切って指導経験のない若手が集められた。

石塚 克彦

木村はやっと運営責任をはずれ、自由にしていいということになった。

新幹事会には山形さんの意見を紹介し、今後の展開について自由に議論してみた。議論が集中したのは山形さんが作家養成講座を開いてくれるのなら、若い劇作家をどんどん育てようではないかということだった。そこで劇団全体の中から希望する企画を募り、山形教室で学びながら企画ごとに臨時編成のチームをつくって、創作上演してみようということになった。

◆常設劇場・希望ホールをつくれ

由井 数

「都心に小さな常設劇場をつくろう」と言い出したのは副幹事長になった由井数である。由井は争議開始当時はまだ正規の劇団員ではなかったが、信州大学の出身で、学生時代には自ら学生劇団を組織した経験を持っている。争議団になってからは全国に公演を呼びかける劇場制作部の中心メンバーとして活動していたから、独自のネットワークを使って都内の劇場を調査し、支持者に協力を呼びかけた。やがて生まれる常設劇場は「希望ホール」と呼ぶことにした。

◆「歌う小劇場・花かご」の誕生

そんな時、作曲家の岡田京子さんの紹介で若い音楽グループが訪ねて来た。国立音楽大学出身の歌手・龍野もと子とピアニストの田宮信子、それにギタリストの青年・加藤章と、ちょっと変わったグループだった。

「希望ホールができるのなら、ぜひ手伝いたい」と言う。そこで彼女たちを劇団に入団させ、やがて開始する希望ホール小劇場の準備班として首都圏の若者の間を歩き回る宣伝活動をさせてみた。

龍野もと子は意外にもコメディが得意で、それにまた一緒に来た加藤君が太っちょな体格で対応して客を沸かせる。これは争議活動の意識で縛られていた統一劇場と違って、まったく新しい魅力だった。どうやらこれが現代の若者文化らしい。そこで希望ホールのスタッフとして、音楽をベースにした「歌う小劇場・花かご」班が誕生することになる。

そのころ川崎市の音楽鑑賞団体「川崎労音」と交流があったので、花かご班は川崎市の工場地帯で働く若者たちを対象に、仲間づくり活動を展開した。

いい機会なので木村もできるだけ同行し、大企業で働く労働者の実態、零細企業で働く若者たちの生活を、仲間目線で取材することができた。

【以下・次号】

★希望ホール開設に先立つ1985年、要請があればどこへでも飛んで行き、集まった人々を楽しませる「歌う小劇場・花かご」班が活動開始。

監督根本銀二　凱旋上映会報告

銚子キッズ映画演劇塾　根本保夫

根本保夫(銀二)

現代座で映画が上映できるようになったと、長谷川葉月さんから聞き、新型コロナの感染が落ち着くのを待って、六月三日（土）と六月四日（日）に上映会を開催した。私がこの舞台に立つのは、四十年ぶり「出航」の舞台以来でした。三日は、一回目に「特攻じいちゃん」、劇団の先輩である愛田巡也さんに生き残りの特攻兵を、老人と子供たちとの交流を描いた物語。二回目に「おばあちゃんは宇宙人」、劇団の先輩である石毛佳世子さんに認知症になった元教師を、認知症に振り回されながら家族の絆を描いた物語。三回目に「発達障害ばかったれ」、ＮＰＯ現代座の長谷川葉月さんに発達障害の小四男子の母親を、家族の無理解や友達のいじめにめげず奮闘する物語。映画の上映前に、私が舞台で歌った唄や思い出の唄を合唱しました。一回目の前に、「ふるさと」「この街」。二回目の前に、「結婚」「北の海へ」。三回目の前に、「遥かなる島」「働く島」。

私のわがままに協力して下さり、演奏に今村さん熊倉さん、合唱に石毛さんや木下さん等たくさんの先輩後輩が美声を響かせ、現代座らしい演劇空間を作りました。この仲間と一緒に歌えることが嬉しく、思わず涙があふれそうでした。「特攻じいちゃん」は上映後、愛田さんと親しかった知人が、愛田さんの演技がよかったと感想を述べてくれました。また劇団の先輩は、この映画は今必要なテーマを語ってる、もっと上映してほしいと。「おばあちゃんは宇宙人」の上映後は、懐かしい先輩が多く訪れ、頑張ってるな、これからもいい映画をと励まされました。また石毛佳世子さんの元気な姿を見、皆さん笑顔で挨拶を交わしていたのが印象的でした。「発達障害ばかったれ」の上映後は、あたたかい拍手とやさしい笑顔に包まれました。アンケートをとったので、印象的なコメントを、「四十代、オープニングの歌最高でした。映画はこんなやさしい強いお母さんがいて、ヒロム君はよかったなと思いました」「七十代、発達障害問題をあつかった、素晴らしい映画ごくろうさまです」。

四日（日）は、「発達障害ばかったれ」を三回上映しました。この日は、上映後に三十分程度座談会を開きました。どのくらい残ってくれるか心配しましたが、七八割の方が残り話が聞けました。二回目三回目の座談会は、小金井市の賀川学園、川上先生にアドバイザーとして参加いただき、三回ともかなり活発な意見が交わされました。参加者も幅広く、保育士、先生、精神医療に詳しい医療関係者、発達障害の自助グループの方。一回目の座談会では、一人一人の意見を聞いていたら、あっという間に三十分がたち意見交換する間もなく終了してしまいました。三回目では、発達障害の子を持つ保護者が相談できる駆け込み寺のような相談所が、市に一カ所必要だという意見がありました。貴重な意見でした。座談会を開いて、よかったと思います。私自身も新たに勉強になりました。

二〇一〇年に、小金井から銚子市に帰郷し、映画にこだわり子供達を集め映画演劇塾を開き十年になりました。第二の故郷、小金井で上映できたことは嬉しいことでした。二日間で約一三〇名のお客さんが鑑賞しました。さらに、お世話になった座付作家の木村快さんが観て下さりたいへん嬉しかったです。

映画「特攻じいちゃん」
出演：愛田巡也、銚子キッズ映画演劇塾第四期生

映画「おばあちゃんは宇宙人」
出演：石毛佳世子、原妃とみ、平野直理子、
銚子キッズ映画演劇塾第六期生

映画「発達障害ばかったれ」
出演：長谷川葉月、怜央、松山千穂、高橋恵里
銚子キッズ映画演劇塾第八期生

映画上映前には観客を魅了した劇中歌を合唱

お　知　ら　せ

TEL：042-381-5165
FAX：042-381-6987

現代座会館で実施される催し物案内

干支の羊毛フェルト作りませんか？

現代座会員の江花幸子さんは、現代座の朗読教室の受講生です。フルートを演奏したり、着付けをしたりと多彩な人です。

羊毛という綿を使って可愛い干支の人形を作り、シルバー人材センター会報2023年1月号の表紙に選ばれ大好評。

現代座の２階をもっと活用したいと、羊毛という綿でつくる干支（えと）の可愛い人形の中から、来年の干支の「たつ」をいっしょに作る教室を開くことにしました。気楽にご参加ください。

9月20日（水）13：30～15：30
現代座２階会議室
受講料（材料費を含む）　2000円
申込み：sako77sako88furuto@icloud.com

現代座会館　6月～8月　活動日誌

6月17日　「現代座レポート94号」発送作業
25日　現代座会議
7月13日　「平右衛門フェスタ」実行委員会に参加
第3木曜日「緑町ふれあいサロン」

【現代座ホール】
5月31～6月3日　「希望舞台」稽古
6月3・4日　根本銀二監督映画上映会
5日　ワーカーズ新人研修「同胞」上映
6・9・15・16日「スタジオ・ポラーノ」稽古
12～14日　「希望舞台」稽古
25・26日　「イディオサヴァン」撮影
7月8日　「青春の庭のうさぎたち」稽古
10～30日　「劇団おぼんろ」稽古
8月6日　「演劇企画もじゃもじゃ」公演
10～20日　「スタジオ・ポラーノ」稽古・公演
22・23日　「劇団・影法師」稽古
24～27日　「青春の庭のうさぎたち」公演

【三階小ホール】
7月23日　津田「リトルコンサート」
26日　川崎平右衛門顕彰会・総会
8月7日　小金井女声合唱団
4～27日　「ＮＰＯ現代座」稽古
30・31日　「リトル銀河」稽古
隔水曜・木曜日　朗読教室
毎火曜・木曜日　ヨガ教室

【二階サロン】
6月5・6日　ワーカーズ新人研修
17日　こども将棋グランプリ
緑町第2町会役員会
7月7日　川崎平右衛門顕彰会理事会
15日　こども将棋グランプリ
29日　緑町第2町会役員会
8月9日　緑町第2町会スマホ教室
6・26日　こども将棋グランプリ
毎水曜日　熟年パソコンサークル

ＮＰＯ現代座の会員になってください
●年間４回発行の活動レポートをお送りします。
●会員による企画行事をお知らせします。
●お申し出があれば、上演舞台の録画ＤＶＤをお送りします。

★年会費（現代座レポート購読料を含む）
一般会員　　3,000円
協賛会員　　10,000円（１口以上）
郵便振替口座番号　00110-7-703151　ＮＰＯ現代座